

E. M. フォースターの求めた人間交流： “The Eternal Moment”

Human Connection in E. M. Forster’s “The Eternal Moment”

平 林 美都子
HIRABAYASHI, Mitoko

テーマとしての〈永遠の瞬間〉

E. M. フォースターの作品には一瞬にして世界観を変えてしまうような詩的な啓示の瞬間がしばしば登場する。たとえば、「パンの神のお通り」(“The Story of Panic”, 1902)では、イタリアのペンションに集うイギリス人グループがピクニックに出かけた山で、一人の少年に牧神パンの神が憑依する。「コロノスからの道」(“The Road from Colonus”, 1903)では、ギリシャ旅行中の老ルーカス氏がプラタナスの大木の空洞で夢想体験をした後、それまでの風景が一変して「名状しがたい」¹⁾光景を目にする。『インドへの旅』(*The Passage to India*, 1924)では、マラバー洞窟の中で、ムア夫人が啓示的なこだまを耳にする。本稿で扱う「永遠の瞬間」(“The Eternal Moment”, 1904)では、オーストリア領アルプスの架空の村ヴォルタで、レイビー女史が20年前に体験した啓示の瞬間がテーマとなっている。若いイタリア人ポーターから求愛された体験である〈永遠の瞬間〉がレイビー女史の小説のタイトルになり、またこの短編のタイトルとなっていることを考えると、この啓示の瞬間の包含する意味を探することは重要であろう²⁾。さらにここでは、〈永遠の瞬間〉の実際の体験がさまざまに解釈されて変容していくことも考慮しなければならないだろう。本稿では、主要な登場人物であるレイビー女史、彼女に求愛したフェオ・ジノーリ、レイビー女史のヴォルタ再訪に同行したレイランド大佐それぞれが、〈永遠の瞬間〉を直接的、間接的にどのように受け取っているのかを考察したい。そして、そこからフォースターの人間交流・人間理解に対する考え方を検証していきたい。

小説となった〈永遠の瞬間〉とその影響

20年前、レイビー女史はヴォルタの山頂で案内人だった若いポーターから熱情的な恋の告白を受けた。当時の彼女は若い淑女にふさわしく「叫び声をあげ、無礼なことをしないよう頼んだ」³⁾。彼女はこのときの体験から『永遠の瞬間』という小説を書く。この小説は「人

間は時間のみによって生きるものではない、過ぎ去った一夜は天国の審判所では一千年になることもある」(199) という思想を中心に書かれたものだ。だが実際のところ、このときレイビー女史は自分の体験の重要な意味に気づいていなかった。いいかえれば、〈永遠の瞬間〉が彼女にもたらしたもの(20年間にわたってもたらし続けたもの)について、十分認識していなかったのである。〈永遠の瞬間〉が彼女にとってどういう重要性があったのかについては、後で議論することにしよう。ただここで確認しておかなければならないのは、彼女の小説には自分の体験の真なる認識は書かれていなかったということである。

『永遠の瞬間』によってレイビー女史は一躍有名になった。ところが、皮肉なことに彼女の小説は「想像力のない人々の間」(199) で大センセーションを巻き起こすことになる。こうした想像力のない「暇な人々」「俗物的な人々」「信仰心に厚い人々」は、自分たちの流儀でそれぞれ『永遠の瞬間』を解釈した。

Idle people interpreted it to mean that there was no harm in wasting time, vulgar people that there was no harm in being fickle, pious people interpreted it as an attack upon morality. (199)

彼らの何人かは〈永遠の瞬間〉のヴィジョンの元になったヴォルタを訪れ、土地の絵を描いたり、論文を書いたりした。「ヴォルタ」という村はこのように誇張され変形されながら、さまざまに表象され、イメージが増殖していくことになる。かつて詩的で啓示的のヴィジョンを与えてくれた素朴な村は、想像力のない人々によって散文化され、卑俗化していったのである。

レイビー女史の思惑とは反対に、『永遠の瞬間』の副産物としてヴォルタはツーリズムの波に乗り、開発が進んでいった。20年後に再訪した彼女は、新しく建設されたホテルのけばけばしいネオンに凝縮されたヴォルタの変貌ぶりに失望してしまう。英語、フランス語、ドイツ語のホテルの名前—— Grand Hôtel des Alpes, Hôtel de Londres, Pension Liebig, Pension Atherley-Simon, Pension Belle Vue, Pension Old-England ——は、滞在客がイギリス人、アメリカ人、フランス人、ドイツ人であることを示唆していると同時に、こうした観光客を送り出す国々の経済力を物語っていた。

20年後に認識した〈永遠の瞬間〉

短編の冒頭、レイビー女史はレイランド大佐に、フェオが求婚した話を「半ば愉快的な逸話」(216-7) として語っていた。しかし、そのとき彼女は〈永遠の瞬間〉の重要性には気づいていなかった。前にも述べたように、彼女は20年前にすら〈永遠の瞬間〉の意味について十分理解できていなかった。当時、身分の低い男性からの求愛を即座に退けたのは、彼女が

社会的因習に従っていたからである。とはいえ、この体験は、以後、下層階級の人々へ善意を示そうというきっかけとなり、彼女が階級を越えた人間交流を欲する気持ちへつなげたことは確かである。現在のレイビー女史は、自分自身の正体を見せることこそが価値ある行動だとまで言い切る。さらに彼女は、今後は機会があれば下層階級に対しても自己露呈すると断言するのだった。

The only thing worth giving away is yourself [...]

Hitherto I've never felt a really big fool; but when I do, I hope I shall show it plainly (192).

「今まで本当に大馬鹿だと感じたことはなかった」というのは、レイビー女史が世間のしきたりを重んじて、淑女たる行動を逸脱することがなかったということである。この言葉の言外に、アルプスの山中でポーターの求婚を拒絶した20年前を示唆しているのは明らかである。

レイビー女史が〈永遠の瞬間〉の啓示を認識するのはそれを喪失するときだったというのは皮肉である。彼女は俗化したヴォルタにも、また自己中心的な国民性を丸出しにする観光客にも、さらにはこうした変化の被害者ともいえるシニョーラ・カントゥにも失望した。シニョーラ・カントゥは変貌したヴォルタに、そして新しいホテルを経営する息子たちのやり方に愚痴をこぼしていた。彼女が古いヴォルタを象徴しているとすれば、彼女の牧場をだめにした地すべりは、そのヴォルタの崩壊を暗示しているだろう⁴⁾。シニョーラ・カントゥの止むことのない愚痴に対して成すすべもないレイビー女史だったが、グランド・アルプス・ホテルのコンシェルジュになったフェオに対しては、俗化したヴォルタの「創造者」としての責任を果たそうと決心する。

フェオに再会した彼女は、彼も『永遠の瞬間』の影響を受けた一人だと実感する。昔のスポーツマンらしい体格が消え、顎にも体にも脂ぎった肉が付いて外見が醜くなったフェオは、ツーリズムという商業主義によって内面も墮落してしまった。このときレイビー女史が願望したのはフェオの再生である。フェオに過去の生の炎を思い出させ、人種や身分に関係なく求愛してくれた20年前の素朴な人間に生き返って欲しかったのである。

ところが、フェオは昔の出来事を思いだすやいなや、若い頃の一時的な恋心によって職を失うのではないかと狼狽えてしまう。しかも、現在のレイビー女史が自分に気があるのではないかと思うと、今度は彼女にウィンクまでする。このように俗物化したフェオを見て、彼女は初めて彼を「愛していない」ことを悟った。逆説めいているが、20年間、自分が彼を愛し続けていたことに気付いたのは、「愛していない」ことを悟ったこの瞬間だったのである。

For she realized that only now was she not in love with him: that the incident upon the mountain had been one of the great moments of her life — perhaps the greatest, certainly

the most enduring: that she had drawn unacknowledged power and inspiration from it, just as trees draw vigour from a subterranean spring. Never again could she think of it as a half humorous episode in her development. There was more reality in it than in all the years of success and varied achievement which had followed, and which it had rendered possible. For all her correct behavior and lady-like display, she had been in love with Feo, and she had never loved so greatly again. A presumptuous boy had taken her to the gates of heaven; and, though she would not enter with him, the eternal remembrance of the vision had made life seem endurable and good. (216-17)

昔、フェオから身分の違いを越えて愛を告白されたとき、レイビー女史は真の人間交流の可能性を感じた。だが、当時の彼女は淑女らしく求愛を拒絶した。しかし自分を今まで生かし続けた生気は、実はこの瞬間がもたらしたものであることを彼女は今になってようやく認識したのである。彼女の生気の源であった〈永遠の瞬間〉はフェオが作り出してくれたものだったとすれば、彼女の方はフェオに対して何も応えなかった。自分が恋をしていたことをフェオに告げなかったのは「単なる偶然」「気まぐれ」(217) だったと彼女は認めるのである。20年前に求婚に応じなかったことが彼の生気を奪うことになり、結果としてフェオは貧富によって人を区別する俗物になりはててしまった——これがレイビー女史がフェオに対して感じる責任だった。

したがって、レイビー女史がフェオの子どもを養育したいと申し出たのは、表向きにはフェオに対する——さらにヴォルタに対する——償いだった。彼女に養育された子どもが、金持ちは下層階級に対しても善人であることを学んでくれるように、そして階級や人種を越えた人間交流をするようにという願望からだった。だが、彼女の深層心理には別の動機があったのかもしれない。ジェイムズ・バザードが指摘するように、子どもは彼女にとり、過去の恋愛の成就を象徴するものだったのかもしれない⁵⁾。

レイビー女史が最後にフェオに尋ねた質問は、求婚が本心だったのかどうかということだった。これはすなわち、〈永遠の瞬間〉を確認するためであり、いいかえれば、過去20年間、自分に生気を与えてくれたことを、また階級を越えた人間同士の交流の存在を確認するためだった。ところが、ツリーズムの金中心の人間関係に染まってしまったフェオに、彼女の思いを理解することはできなかったのである。

レイビー女史に好意を持っているレイランド大佐も、彼女をまったく理解していなかった。もっとも、彼は使用人に対して友人同士のような会話をする彼女の行動を快く思っていないものの、「[彼女の] 考え方をわかっている」(198) と自分では思っていた。常識を無視する「風変りな女性」(198) であるレイビー女史の影響で、彼も因習を「くだらない」(197) と思い、未婚の男女の旅に忠告を与える妹の手紙を破り捨ててしまう面も持ち合わせていた。しかしその一方で、レイビー女史と結婚すれば、年収2000ポンドをもたらしてくれる

ということが、彼に「ある種の香気」（198）を与えていたのも事実だったのである。

結局、レイランド大佐はイギリスの中産階級の因習的な性格からは脱皮できなかった。彼はレイビー女史が語る20年前の求愛を逸話レベルで受け止めていたのであり、〈永遠の瞬間〉に凝縮された真の人間交流というものを理解するだけの想像力を持ち合わせていなかった。「十分教育を受け、特権と呼ばれるものすべてを持っているし、自分では洞察力、教養、人間に対する理解力を持っていると思っている」大佐は、レイビー女史が自分の本性を露呈してしまう現場に居合わせると、「何も特権も持たず、貧しくて俗化させられ、昔の良い性質が環境によって汚染され、金持ちにサービスしている間に男らしさや素朴さを失ってしまった」フェオと同じレベルの感情を見せてしまったのである（220-21）。

カンパニーレの象徴性

素朴な共同体が観光地へと俗化したヴォルタの変貌ぶりを見た途端、レイビー女史は失望と自責の念にかられた。そんな彼女が唯一「美しい」と感じたものは、カンパニーレ（鐘楼）だった。ヴェニスに聖マルコ教会のものを真似た鐘楼は、村を導くかのように、障害物に立ち向かうような姿でそびえ、鐘の音を山々に響かせていた。

Far up the valley was a large white village, tossing on undulating meadows like a ship in the sea, and at its prow, breasting a sharp incline, stood a majestic tower of new grey stone. As they looked at the tower it became vocal and spoke magnificently to the mountains who replied. (193)

鐘がどこで作られたのか特定できず、そもそも「[鐘の]音には国籍がない」（193）ことは、コスモポリタンな観光地となったヴォルタの新しい様相を暗示しているようでもある。ヴォルタに到着後、レイビー女史が直観的にカンパニーレに愛着を持ったのはそのためだった。

The family affection, the affection for the commune, the sane pastoral virtues — all had perished while the campanile which was to embody them was being built. (205)

「家族愛、共同体への愛、健全で素朴な美德」はなくなったが、それらの象徴となるものとしてカンパニーレが建てられた。レイビー女史はその鐘楼を建築した人々の豊かな善意を直観的に信じたのである。いうなれば、カンパニーレはレイビー女史が求める真の人間交流の象徴に思えたのである。

この短編には、カンパニーレとレイビー女史との象徴的な関係が随所に表現されている。レイビー女史がグランド・アルプス・ホテルを突然引き払って、ビショーネ旅館へ移ったと

きのことである。レイランド大佐は彼女の真意を探ろうとして、月明かりの中でカンパニーレを探そうとする。彼がレイビー女史の風変わりさを納得したとき、谷間にカンパニーレの姿が現れる。レイランド大佐にとってカンパニーレがレイビー女史を象徴しているのは明らかである。さらにこのとき、彼の視線が破り捨てた妹の手紙からカンパニーレへと移動していることを考えると、レイビー女史ならぬ鐘楼は因習的な妹と対照的な価値観を内包していることが暗示されているのである。

続いて、レイビー女史がピシヨーネ旅館のシニョーラ・カントゥを見舞ったときのことである。シニョーラ・カントゥがフェオの名前を口にした途端、鐘の音が響き渡る。するとレイビー女史は、「弱り切った身体の凍った血管に、鐘の音の脈打つリズムが血液を呼び戻す奇妙な効果を与えてくれた」(209)と感じ、フェオにかつての素朴な愛と美德を期待して、彼との再会を決意するのである。

しかし、レイビー女史がカンパニーレに人間交流の象徴を期待したとしても、実際のヴォルタはコスモポリタンな村ではなかった。元来ヴォルタは地理的にも歴史的にも政治的係争地であった⁶⁾。短編の冒頭には、レイビー女史らの一行がイタリア(ラテン語圏)からオーストリア(ドイツ語圏)の国境を越える様子が描かれている。ヴォルタは「アッハとヤーの国」(190)、すなわちオーストリア領であり、「ゲルマン民族がラテン民族を制圧しつつある」まさに「係争地の谷間」(204)だった。このヴォルタが観光地となりコスモポリタンな社会になったかという、実はそうではなかった。短編の中で、ドイツ人は飲み食いだけに興味がある旅行者として、あるいは人種差別をするウェートレスとして登場する。イギリス人は同国人の親睦の場所をヴォルタに作ろうと募金活動をするナショナリストとして描かれる。不眠症だというアメリカ人旅行者は、朝の鐘の音と農民の夜の騒ぎをやめさせる我儘で自己中心的な人種として描かれる。地域共同体の素朴な美德を象徴する鐘の音は、こうしたツーリズムによって抑圧されてしまうのである。ここにはコスモポリタンな見地に立つ姿は見受けられない。

レイビー女史とカンパニーレとの象徴的關係は続く。彼女がフェオと〈永遠の瞬間〉を共有することに完全に失敗したとき、再び鐘が鳴り響いた。しかしこの鐘の音は、少し前のように「凍った血管に […] 血液を呼び戻す」効果はなかった。フェオはカンパニーレの土台の地すべりが始まっていること、まもなく鐘楼が倒れるであろうことを観光客たちに告げた。すでに指摘したように、地すべりは近代化したヴォルタの崩壊を暗示する。カンパニーレ倒壊の予測とは、ヴォルタにおける「家族愛、共同体への愛、健全で素朴な美德」の崩壊の予兆であろう。この予測をフェオが告げたことも示唆的だ。〈永遠の瞬間〉を作り出してくれた人物は、レイビー女史の人間交流への希望をも砕くのである。

同性愛のサブテキスト

20年前の求愛が本心からかどうかをレイビー女史が問い質したとき、フェオの狼狽ぶりはいささか異様に映る。彼女はすでにその話題を口にしており、しかも最初のパニックから立ち直ったフェオが、この質問の少し前に彼女にウィンクまでしていることを考えると、彼の狼狽ぶりはやはり奇妙である。同様に、階級が下であるコンシェルジュに自分の気持ちをあからさまにさらけ出しているレイビー女史を擁護しようとしないうレイランド大佐の態度もまた、釈然としない。とくに、異なる階級の者が混じり合う会話を殊更嫌っていたレイランド大佐が、フェオと共に謀してまでレイビー女史を頭のおかしい女に仕立てあげようとするのはなぜだろう。彼女の行動が支配階級に属する人々全員の権威を失墜させたのは確かだとしても、これははたして山田美穂子がいうような「重罪にあたる罪」といえるのだろうか⁷⁾。

物語の最終場面を別の観点から考えてみよう。レイビー女史はフェオとの交流が失敗した後、一人で立ち去っていく。そして物語はレイビー女史を離れ、レイランド大佐とフェオの対話で終わっている。〈永遠の瞬間〉は、あるいは真の人間交流は虚しく消えていくというのが、物語の結末なのだろうか。

この疑問に答えるために、レイビー女史の欲望を男性のホモセクシュアルな欲望とみなす同性愛のサブテキストをここに読み取ってみたい。大熊栄は、フォースターの作品にはリア（『天使も踏むを恐れるところ』 *Where Angels Fear to Tread*, 1904）、ルーシー（『眺めの良い部屋』 *A Room with a View*, 1908）、アグネス（『果てしなき旅』 *The Longest Journey*, 1907）という「欲望派」の女性が多く登場すること、彼女たちが共通して惹かれるのは頭の単純な肉体派の男性であることを指摘する。さらにモーリス（『モーリス』 *Maurice*, 1971）が惹かれるのも肉体派の男性であることから、「欲望派」の女たちはすべて作者のホモセクシュアリティの隠れみの⁸⁾ではないかと大熊は推測する。昔のフェオは頭の単純なスポーツマン風の体格をした美少年であり、レイビー女史は確かに大熊の言う「欲望派」の女性の一人だといえるだろう。

レイビー女史を男性Rとして読んでいくと、次のような内容となるだろう。フェオが山頂でRに愛の告白をしたが、当時のRはそれを拒絶する。20年後にRは親しい友人レイランド大佐とヴォルタを再訪。Rはフェオにかつての求愛が本心かどうかを問い質す。昔の同性愛志向が発覚することを恐れてパニックになったフェオは、必死にそれを否定する。レイランド大佐もRに対しては特別な愛情を持っていた。ところが、本国では犯罪行為にあたる同性への愛が他の旅行客の前で露呈されてしまうと、大佐はもはやRの友人でい続けるわけにはいなくなった。大佐はフェオと結託してRを狂人に仕立てあげた。

上のサブテキストの読みは一見突飛にみえるかもしれない。しかし、いわゆる「イタリアもの」と呼ばれている同時期の、とくに短編小説——「パンの神のお通り」「コロノスから

の道」「サイレーンの物語」(“The Story of the Siren”)——が同性愛のテーマを(暗に)包含していることを考えると、この読みはそれほどの外れとはいえないだろう。フォースターの間人交流は階級や人種を越えるというだけでなく、同性をも含まれているのは周知のことである。そして同性愛を暗示するサブテキストの存在は、最後のレイランドとフェオの共謀を理解するヒントになるといえるだろう。

そして物語の結末は、レイランド大佐という奇妙な人物に行き着くことになる⁹⁾。ジョン・ハゴープイアンが指摘するように、レイランド大佐はコンシェルジュとの個人的な会話を避けた方が体面を保つことになったはずだ¹⁰⁾。にもかかわらず、彼はフェオの腕に触れ、対話を求めざるをえなかった。彼の守るべき体面が何であれ、レイランド大佐はそれを逸脱する行動をとってしまったのである。つまり、彼は自分の本性をさらけ出してしまったということである。それはホモソーシャル(あるいはホモセクシュアル)な本性である。レイビー女史は「自分自身の正体を見せることこそ価値ある行動であり」「階級間の精神的壁を破る唯一の門だ」(192)と主張していた。レイランド大佐は、このような人間交流を望んだレイビー女史の行動を非難して、彼女を見放した。ところが体面を守りたかった当の本人が、最後に自己露呈をすることになった。レイビー女史を狂女に仕立てることで男同士の絆を強めるためか、あるいは異性愛を捨てて同性愛に向かうのか。ハゴープイアンもいうように、物語の結末には、フェオが相手の意図を受け止めて両者が理解し合ったという意味で、レイランド大佐にとっての「永遠の瞬間」になりえたのかもしれない¹¹⁾。とはいえ、作者が独善的な大佐の行動に真の人間交流を見出すことはなかったはずである。

注

- 1) E. M. Foster, “The Road from Colonus”, *Collected Short Stories*, 98.
- 2) 本論では、短編の題は「永遠の瞬間」、レイビー女史の小説には『永遠の瞬間』、概念としては〈永遠の瞬間〉として区別した。
- 3) E. M. Forster, *Collected Short Stories* (Penguin Books, 1988), 188. 本稿での“The Eternal Moment”の引用はすべてこのテキストからに拠る。引用の後の()内に頁数を記す。日本語訳は筆者のもの。
- 4) Stephen K. Land 42.
- 5) James Buzard 308. John V. Hagopianもレイビー女史の申し出を「性的に異常をきたしている」と厳しい論調で言う(170)。Dominic Headは彼女の行為を「純粹で無死の贖い(atonement)」でありまた「個人的で一部分利己的な罪滅ぼし(redemption)」との混乱した意思表示だと述べている(80)。
- 6) 山田美穂子は「永遠の瞬間」に描かれたコスモポリタンの表象を論じている。
- 7) 山田27.
- 8) 大熊栄「軽愚者E. M. フォースターと英国ポストモダンの文学」202. 短編では“Ansell”のエドワードが惹かれるアンセルも「肉体派」である。
- 9) Buzardの“a sexless but charmingly scandalous companionship”(307)という描写や、Hagopianの“the Platonic companion of the semi-invalid Colonel Leyland”(170)という表現はいずれも、レイビー女史とレ

イランド大佐の関係の奇妙さを示唆している。

10) Hagopian 172.

11) Hagopian は “the immense relief and gratitude of the concierge, which closes the story, may very well be for him a sort of ‘eternal moment’” と解釈している（172）。

文献

Buzard, James. *The Beaten Track: European Tourism, Literature, and the Ways to ‘Culture’ 1800–1918*. Oxford: Clarendon P, 1993.

Forster, E. M. *Collected Short Stories*. Harmondsworth: Penguin Books, 1988.

Hagopian, John V. “Eternal Moments in the Short Fiction of E. M. Forster.” *The Critical Response: Early Responses 1907–44; The Short Fiction; Forster’s Criticism; Miscellaneous Writings*. Ed. J. H. Stape. Mountfield: Helm Information, 1998. 165–172.

Head, Dominic. “Forster and the short story.” *The Cambridge Companion to E. M. Forster*. Ed. David Bradshaw. Cambridge: Cambridge UP, 2007. 77–91.

Land, Stephen K. *Challenge and Conventionality in the Fiction of E. M. Forster*. New York: AMS, 1990.

大熊栄「軽愚者E. M. フォースターと英国ポストモダンの文学」『ユリイカ』8月号（1992）：198–206.

山田美穂子「“Eternal Moment” のケース・スタディ：E. M. フォースターのCosmopolitanismに関する考察」『青山学院女子短期大学紀要』60（2006）：15–30.